フェドシューク
『古典作家の難解なところ
あるいは
19世紀ロシアの生活百科』(その9)

Ф. А. Федосюк
«Что непонятно у классиков
или
Энциклопедия русского быта XIX века»

鈴　木　淳　一
伊　藤　敏　宏

これは「文化と言語」56号（2002年3月)、57号（2002年10月)、62号(2005年3月)、63号（2005年10月)、64号（2006年3月)、65号（2006年10月)、66号（2007年3月)、67号（2007年11月）に発表したフェドシューク著『古典作家の難解なところ、あるいは19世紀ロシアの生活百科』翻訳の続きである。9章、1章、2章、3章、4章、5章、6章、7章に続いて、今回は8章を訳出することとした。今回の翻訳作業も、大学院生が主体となり、鈴木がそれに朱を入れるというスタイルでおこなった。6章は2節からなるが、伊藤が1節の一部、鈴木が残りを分担し、最後に鈴木が全体的な文体の統一を図った。

注についても前回同様である。訳注は［　］という形でできる限り本文中に組み入れるようにしたが、より詳細な説明が必要と判断した場合は脚注をつけた。訳語だけで分かり難い場合はロシア語を並列するようにしたのも前回同様である。

第8章
勲章とメダル
ОРДЕНА И МЕДАЛИ

1節
勲章とその標識
Ордена и их знаки

帝政時代において勲章の授与はただたんに勲功を奨励し、認定するものであったばかりか、勤務先での昇進と個人的な成功のために重要、かつ必須とさえ言える条件でもあった。1826年までロシアの勲章はいずれも世襲貴族の権利を約束するものであったが、後にこの特権は位の高いいくつかの勲章だけに限定されることになった。

革命以前のロシアには全部で8種類の勲章があったが、そのうちのいくつかは3つ、乃至は4つの差別化された等級を持っていた。

〈**勲章の標識 знаки ордена**〉となったのは、「十字章 крест」に「星章 звезда」、そして「勲章綬 орденская лента」であった。

最高等級の勲章、すなわち一等勲章には、袈裟懸けにする幅広の〈**綬 лента**〉がついていて、十字形をした勲章自体は太腿付近の綬の上に固定されていた。また勲章のもう一つの標識である〈**星章 звезда**〉は胸に飾られた。というわけで一等勲章には3つの標識がすべて備わっていたことになる。「星章をつけた御仁 человек со звездой」、「綬を懸けた御仁 господин в лентах」というのは、非常に重厚な響きを持つ表現であった。

ロシア古典文学では、「勲章綬」という意味での〈**カワレーリヤ кавалерия**〉という言葉にしょっちゅう遭遇する[1]。ゴーゴリの『検察官 Ревизор』に出てくる市長は、将軍の位まで上り詰めることを夢見ながら、綬の意味がよく

[1] 「кавалерия」は通常「騎兵隊 конница」の意味であり、7章ですでにお馴染みである。

分かっていない。彼は妻にこう言っているのである——「ええい、くそ、将官になれたらすごいんだぞ！　お前はその肩に綬を懸けてもらえるんだぞ。どんな綬がいいかね、アンナ・アンドレーエヴナ、赤い綬か、それとも空色の綬かね？　А, чёрт возьми, славно быть генералом! Кавалерию повесят тебе через плечо. А какую кавалерию лучше, Анна Андреевна, красную или голубую?」[5幕1場]。

市長の問に対しては、アンナ・アンドレーエヴナに代わってこう答えることができよう——「もちろん空色の綬ですわ。それはロシア最高の勲章、アンドレイ・ペルヴォズワンヌィ勲章の綬なんですから Конечно, голубую; ведь это лента высшего русского ордена — Андрея Первозванного」。しかしこの勲章は滅多に授与されず、叙勲されるのは最高位にある一握りの人々だけであり、一介の将官が誰でももらえたわけではなかったのである。

俗語では「カワレーリヤ」はまた、「一回限りの功労徽章 один-единственный наградной знак」を意味することもできた。オストロフスキーの『真実もよいが、幸福はもっとよい Правда хорошо, а счастье лучше』では、屋敷番として雇われた退役下士官のグロズノーフがこう自慢している——「俺はいつだって結構な給料をもらってきたし、功労徽章も持っている Я всегда хорошее жалованье получал, я кавалерию имею」[4幕7場]。ここで言及されているのはもちろん、「兵士用のゲオルギー徽章 солдатский Георгий」のことである。

勲章の所有者は〈**帯勲者（カワレール）кавалер**〉と呼ばれた。トルストイの『戦争と平和 Война и мир』には、クゥトゥーゾフのもとに「その大部分が帯勲者である少壮の驃騎兵で編成された儀杖兵 почётный караул молодцов-гвардейцев, большей частью кавалеров」がいたとあるが[3巻2部15章][2]、これはつまり、勲章を授与されたとくに選り抜きの精鋭部隊が元帥を警護して

[2] これが3巻2部15章からの引用だとすれば、単語が一つ異なっている。正確にはこうである——「その大部分が叙勲者である少壮の擲弾兵で編成された儀杖兵 почётный караул молодцов гренадеров, большей частью кавалеров」。

いたということである。

十字章は細い綬で首に掛けられ、等級の高いそれは現在のネクタイの結び目にあたる部分に、また等級の低いそれは胸の部分に飾られることになっていた。胸の十字章は初め軍服のボタン穴に固定され、時代が下るとピンで留められるようになったが、それでも以前と変わらず「ボタン穴に留めた十字章 крест в петлице」という表現が常用された。胸に飾る十字章にも綬がついていた。勲章が戦功に対して授与された場合、その事実は綬に施された特別な結び目、すなわち〈**蝶結び бант**〉によって顕彰された。

『智恵の悲しみ Горе от ума』ではスカロズゥプが、1813年に従弟とともに表彰されたことを自慢している――「8月3日の戦功に対する勲章です。我々は塹壕に身を潜めていました。／従弟には綬に蝶結びのついた勲章が授与され、小生は首に飾る勲章をいただきました За третье августа; засели мы в траншею: ／Ему дан с бантом, мне на шею」[2幕5場]。この情報は現代の読者や観客にとってほとんど内容ゼロである。この一節の意味するのは、スカロズゥプには首の部分の飾る勲章が授与され（おそらくは「ヴラヂーミル3等勲章 орден Владимира 3-й степени」）、彼の従弟には、「蝶結び」の施された綬付きの胸に飾るべき「ヴラヂーミル4等勲章」が授与されたということである。唯一「聖ゲオルギー勲章 орден Святого Георгия」だけは「蝶結び」と無縁であった。この勲章は軍人にしか授与されなかったからである。

勲章の追求は、官位の追求同様、大半の貴族や官吏の一大特徴をなしていた。グリボエードフの『智恵の悲しみ』に出てくるファームゥソフは、勲章を非常に重要視している。リーザはソフィアに彼のことをこう語っている――

あなたのお父さまも他のモスクワの皆さんとお変わりありませんわ。
星章をさげた高い官位のお婿さんがほしいんですわ。とはいえ
ここだけの話、星章をさげた誰もが金持というわけにはまいりません。
　　ですからもちろん、そのお婿さんは金子もたんまりお持ちで、
優雅に暮らしたり、舞踏会を開いたりできなくちゃいけないんです。

Как все московские, ваш батюшка таков:
Желал бы зятя он с звездами, да с чинами,
А при звездах не все богаты, между нами;
　　Ну разумеется, к тому б
И деньги, чтоб пожить, чтоб мог давать он былы...
[1幕5場]

デルジャーヴィンの寸鉄人を刺すような詩句も有名である――

たとえどんなに星章で飾り立てようと
驢馬はあくまでも驢馬でしかありえまい。
智恵を働かせなければならないときに
ただ忙しく耳をぴくつかせるだけなのだ。
Осел останется ослом,
Хотя осыпь его звездами,
Где должно действовать умом,
Он только хлопает ушами.
[『貴顕 Вельможа』(1774年)、5連1～4行目]

またプゥシキンは『チャアダーエフへ Чаадаеву』[1821年]の中でこう書いている――

高位にある追従屋や星章を下げた無知蒙昧の徒の、[あるいは
かつてその放蕩三昧で世間の津々浦々まで唖然とさせたが、
後に自らを啓発して恥辱を雪ぎ、
ワインを断ってトランプ賭博のいかさま師となった例の哲学者の]
物々しき批判の声など、この私にはとるに足らぬことだった。
Что нужды было мне в торжественном суде

Холопа знатного, невежды при звезде,
[Или философа, который в прежни лета
Развратом изумил четыре части света,
Но, просветив сеся, загладил свой позор:
Отвыкнул от вина и стал картежный вор?]
[2連21〜22行目]

チェーホフの短篇『でぶとやせ Толстый и тонкий』では、長らく会うことのなかった幼馴染みが、時の経過とともにまったく異なった境遇に立たされている。痩せた男がスタニスラーフ勲章（おそらくは3等という最下位等級の勲章）を持っているのに対し、将官にまで上り詰めた太った男の方は星章を二個、すなわち両方ともに一等と思われるスタニスラーフ勲章とアンナ勲章の二つの星章を持っているのである。まるで二人の友人の間には、深淵が横たわっているかのようである。

古い勲章の特質は、最下位から最高位にいたるまですべての勲章が厳格な一貫性のもとに授与され、同じ等級の同じ勲章が同一人物に授与されることなど決してなかったということである。より等級の高い勲章だけを身につけることが許され、以前に授与された等級の低い勲章は手許に保管するだけで、身に帯びることなどなかった。さながら最上位の勲章が、それ以下の等級の勲章はすでに授与済みであることを語り明かしているかのようだったのである。ただ交差剣のついた勲章 ── すなわち戦功に対して授与される勲章と、それに聖ゲオルギー勲章だけは、19世紀後半以降になると、その等級に関わらず身につけることを許されたのであった。

勲章の全般的な特徴説明はこれまでとしよう。それでは、それぞれの勲章はいったいロシア古典文学の世界の中でどのように描かれているのであろうか。

〈聖ゲオルギー勲章 орден Святого Георгия〉。1769年に制定されたこの勲章は、一人ぽつねんと屹立しているかのようである。ただ戦功だけに対して授

与されるロシア唯一の勲章だからである。

この勲章の標識となっているのは、白い（琺瑯引きの）十字章である。その綬は黒と橙の縞模様で、同じ綬が後年そのままソ連の「名誉勲章 орден Славы」と「対独戦勝メダル медаль «За победу над Германией»」にも使用されることになった。

1等と2等という等級の高いゲオルギー勲章は滅多に授与されないばかりか、その栄誉に与れたのは最上級の司令官だけであった。『戦争と平和』には、ナポレオンをロシアから撃退した後、アレクサンドルI世がヴィリナ（ヴィリノ［リトワニヤ共和国の首都ヴィリニュスの旧名］）でクゥトゥーゾフ元帥に接見し、不承不承ゲオルギー1等勲章を下賜するという場面がある［4巻4部10章］。同じ長篇にはまた、モスクワの英国クラブでのレセプションにバグラチオーン将軍が、「ロシアや外国の勲章を諸々掛け連ね、左胸にはゲオルギー星章を佩用して с русскими и иностранными орденами и с георгиевской звездой на левой стороне груди」、つまりゲオルギー2等勲章を佩用して登場する場面もある［2巻1部3章］。

ゲオルギー1等勲章は、その存在の全期間を通じ、全部で25人にしか授与されていない。

さらに『戦争と平和』には、フィーリ村での軍事会議にバルクラーイ・デ・トールリが、「首にゲオルギー勲章をつけて с Георгием на шее」、すなわちゲオルギー3等勲章をつけて座っている場面も出てくる［3巻3部4章］。

ゲオルギー勲章の標識は等級によって異なっていた。1等勲章の場合それは、幅10 cmの暗黄色の綬で右肩から袈裟懸けされた十字章、それに左胸の「勤労と勇気を称えて За службу и храбрость」と上書きされた、先端が4つの星章であった。2等勲章の場合それは、頸部に飾る大きな白い十字章と先端が4つの星章であった。また3等勲章の場合は頸部に飾る小さな白い十字章であり、4等の場合は胸に飾る、とはつまりボタン穴に固定する白い十字章であった。

ネクラーソフの物語詩『誰にロシアは住みよいか Кому на Руси жить хо-

рошо』では、地主の老公爵のことがこう歌われている――

ボタン穴に白い十字章を留めている
(ヴラスが言うには、それは
戦勝者ゲオルギー十字章だとのこと)。
В петлице крестик беленький
(Влас говорит: Георгия
Победносца крест).
[3部「最後の貴族 Последыш」、3章]

ゴーリキーの『クリム・サムギンの生涯 Жизнь Клима Самгина』に出てくるトロフィーモフ中尉は、その息遣いが「荒々しくもせわしなく、胸の十字章が飛び跳ねるほどであった бурно и часто, что беленький крест на груди его подскакивал」。彼の十字章が胸に飾られていたのならば、それはネクラーソフの老公爵同様、ゲオルギー4等勲章である。

『戦争と平和』のニコライ・ロストフは、ゲオルギー4等十字章を授与されている。しかしそのときまでにも彼は、まだ士官学校生だったときに、フランス軍の士官を生け捕りにしたことで〈**ゲオルギー十字章 георгиевский крестик**〉を授与されている。はたしてこの十字章はいかなるものなのであろうか。

1807年、「下位官等」のために、すなわち兵卒や下士官のために、「聖ゲオルギー軍事勲章戦功徽章 знак отличия военного ордена Святого Герогия」が導入され、1913年以降この銀製の十字章は公式的に「ゲオルギー十字章 Георгиевский крест」と呼ばれるようになった。ニコライ・ロストフやレールモントフの『現代の英雄 Герой нашего времени』中の1編『公爵令嬢メリー Княжня Мери』に登場する士官学校生グルゥシニツキーが佩用しているのも、これと同じ「ゲオルギー十字章」である。この十字章を授与された者は、公式的には聖ゲオルギー勲章の「帯勲者 кавалер」とはみなされず、たんに書類上

「準帯勲者として登録される числились при ордене」だけであった。「聖ゲオルギー勲章帯勲者 кавалер ордена Святого Георгия」となりえたのはただ、「戦功徽章 знак отличия」ではなく、4等級のうちのいずれかの等級の聖ゲオルギー勲章を授与された将校や将官たちだけであった。

1856年になると「聖ゲオルギー軍事勲章戦功徽章」に4つの等級が設けられた。1～2等級は金製で、3～4等級は銀製であった。これら4等級すべての戦功徽章の所持者となったのは、ショーロホフの『静かなドン Тихий Дон』の主人公グリゴーリー・メレーホフである。

〈聖スタニスラーフ勲章 орден Святого Станислава〉。この勲章は、1831年に導入された最下位の勲章で、それ以前はポーランドにしか存在しなかった。4つの等級があったが、1839年に4等級は廃止された。1等級の標識は、二本線の白い縁取りが施された赤の綬によって右肩から袈裟懸けされた赤い十字章と、左胸に飾られる星章であった。2等級の標識は頸部に飾る十字章、3等級と4等級のそれは胸に飾る十字章であった。

この勲章は主として文官に授与された。トゥルゲーネフの短篇『犬 Собака』には、国政顧問官（5等文官）のアントン・ステパノーヴィチに、「やっかみ連中の言い方を借りるなら、『聖スタニスラーフ勲章が遮二無二押しつけられてしまった』по выражению его завистников, «влепили станиславку»」とある。

トゥルゲーネフはまた散文詩『満足した人間 Довольный человек』［1部8番目］において、主人公の若い男がどうしてそんなに精神的に高揚しているかを考察し、こう書いている――「もしや彼の首には、おお、ポーランド王スタニスラーフよ、お前の美しい八つの先端を持つ十字章が掛けられてしまったのではないか！　Уж не возложили ли на его шею твой красивый осьмиугольный крест, о польский король Станислав!」。ここで言及されているのは、聖スタニスラーフ2等勲章のことである。

ドストエフスキーの『虐げられた人々 Унижённые и оскорблённые』に出て

くるネルリは、ドイツ人医師が勲章を佩用しており、その「大きなスタニスラーフ勲章が首元で揺れていた огромный Станислав, качавшийся у него на шее」のに気づいている［2編8章］。ネルリの目にはこの勲章が、「巨大なサイズ чрезвычайных размеров」のものとして映っている。

チェーホフの『三人姉妹 Три сестры』に登場する視野の狭い、純朴な教師、クゥルィギンは、こう語っている――「このとおり私の人生はこれまでずっと幸運で、私は幸せです。スタニスラーフ2等勲章さえ持っていますからね А мне вот всю мою жизнь везёт, я счастлив, вот имею даже Станислава второй степени」［4幕］。

聖スタニスラーフ3等勲章は、フェドートフの有名な絵画『新米帯勲者 Свежий кавалер』に描かれている[3]。酒宴の翌朝、その官吏は料理女に自慢したいがために、前夜授与された勲章をガウンにこれ見よがしに飾りつけている。「新米帯勲者」とは、ここでは「なりたてほやほやの勲章所持者 ново-испечённый носитель ордена」という意味である。

官等の低い官吏たちは聖スタニスラーフ3等勲章を、自らの存在を職場において知らしめる取っ掛かりとして大いに自慢した。ゲルツェンはこう書いている――「カーニバル時の仮面は女性にとって、駅長にとってのスタニスラーフ勲章と同じようなものとなるのである Маска на время карнавала становится для женщин то, чем был Станислав для станционного смотрителя」［『過去と思索 Былое и думы』、8部2章「麗しきヴェネツィア Venezia la bella」(1867年2月)］[4]。つまり箱の勲章が何か非常に望ましいものだったということである。

〈聖アンナ勲章 орден Святой Анны〉。この勲章がロシアの勲章に仲間入り

---

[3] 論文末尾の〈付録1〉を参照のこと。

[4] フェドシュークの引用は若干不正確。正確には以下の通り――「カーニバルのときの仮面というのは女性にとって、駅長にとってのボタン穴に留められたスタニスラーフ勲章と同じようなものとなるのである Маска на время карнавала становится для женщины то, чем был Станислав в петлице для станционного смотрителя」。

したのは1797年、パーヴェルⅠ世の時代である。この勲章は文官と軍人の双方に対して授与されたが、1847年以降になると「同じ一つの職位、ただし8等級以上の職位に、瑕疵なく12年間勤務した者に対してза беспорочную 12-летнюю службу в одной должности, но не ниже 8-го класса」、つまり文官では「省顧問官коллежский ассесор」以上、軍人では「少佐майор」以上（1884年以降は「大尉капитан」以上）の地位にある人々に授与されるようになった。

1797年から1815年までの等級は3つであったが、1815年に4等級が制定され、軍人だけに授与されるようになった。4等級の場合、勲章の標識（十字章）は武器の取っ手部分に、すなわちサーベルсабля、あるいはエペшпагаの柄に取りつけられた。

この勲章の綬は赤で、黄色い縁取りが施されていた。

聖アンナ1等勲章の標識の一つは、赤い琺瑯（1815年以前は赤いガラス）をあしらった金の十字章で、綬によって左肩から袈裟懸けにされた。もう一つの標識は、先端が8つの星章で、左胸に飾られた。

聖アンナ2等勲章の標識は、4つの先端を持つ赤い十字章で、十字章には金の縁取りが施され、4つの先端の間には透かし彫りがあしらわれていた。この勲章は綬で頸部に留められた（「頸部に飾るアンナ勲章Анна на шее」）。

聖アンナ3等勲章の標識は、胸に留める赤い十字章で、幅の狭い綬に繋がれていた（「ボタン穴に留められたアンナ勲章Анна в петлице」）。

1855年以降になると1～3等級の聖アンナ勲章には交差した剣が付加されるようになるが、それらは軍人専用であった（「交差剣付アンナ勲章Анна с мечами」）。交差した剣はまたスタニスラーフ勲章にもあしらわれるようになった。

1829年から1874年まではさらに、聖アンナ1～2等勲章の価値を高めようとする「王冠付アンナ勲章Анна с короною」も存在した。ネクラーソフの詩作品『秘密Секрет』では、いかがわしい方法で富を築いた、徴税代理人も務める商人が死の間際に、慈善事業に対して勲章を下賜されたことを自慢している――

俺は年に千ルーブリ寄付して
大物になったのだ。
俺には王冠付アンナ勲章も、
「孤児の友」という称号もある。
Я сделался важной персоною,
Пожертвовав тысячу в год:
Имею и Анну с короною,
И звание «друга сирот».
[2章5連]

コジマー・プルゥトコーフの寓話詩『官吏と雌鶏 Чиновник и курица』には、「かなり太った、それほど若いとは言えない官吏 чиновник толстенький, не очень молодой」[1行目] がネフスキー大通りを走り回り、「彼の首もとでは、さながら燈台のように／王冠付アンナ勲章が揺れていた колыхалася на шее у него,／Как маятник, с короной Анна」[7-8行目] 顚末が語られている。

ゴーゴリの『死せる魂 Мёртвые души』に登場する県知事の場合、「その頸部にはアンナ勲章が飾られていて、星章の叙勲を推薦されたと噂されていた Анна на шее и поговаривали, что был представлен к звезде」[1部1章]。つまりこの知事は、聖アンナ1等勲章の叙勲を推薦されたということである。

ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟 Братья Карамазовы』では長男ドミートリーのかつての上司のことが、「交差剣付アンナ勲章を首に飾った、戦功輝かしい勇猛果敢な大佐 храбрый полковник, заслуженный, имевший Анну с мечами на шее」と語られている [1部2編6章]。

チェーホフの短篇『頸部に飾るアンナ勲章 Анна на шее』では、勲章名がうまく利用されている。モデスト・アレクセーエヴィチに聖アンナ2等勲章（頸部に飾るアンナ勲章）を手渡すとき、上司の「輝かしきお方 его сиятельство」[5]

[5] 皇族に属さない公爵、伯爵への敬称

はこう言っている――「『さてこれで、あなたはアンナを3つ手になさったわけですね』――彼は自分の爪がピンクの白い手を眺めながら言った――『ボタン穴に留めるのを1つ、それに首に飾るのを二つ』—Значит, у вас теперь три Анны, — сказал он, осматривая свои белые руки с розовыми ногтями, — одна в петлице, две на шее」[2章]。ここで仄めかされているのは、アンナという名を持つモデストの妻のこと、そしてモデストがすでに所持している聖アンナ3等勲章のことである。これに対してモデストはこう答えている――「今はただ小さなヴラヂーミルの誕生を待つばかりでございます Теперь остается ожидать появления на свет маленького Владимира」[2章]。このフレーズは、聖アンナ2等勲章のすぐ上に位置するヴラヂーミル4等勲章をまもなく授与したいという希望の直截的な表明に他ならない。

〈聖ヴラヂーミル勲章 орден Святого Владимира〉。この勲章は、「利益、廉潔、名誉 польза, честь и слава」のスローガンとともに、1782年に制定された。文官にはもちろんのこと、軍人にもその戦功に応じて授与された。

この勲章には4つの等級があった。綬は赤で、黒い縁取りが施されていた。

1等勲章の標識の一つは、黒と金に縁取られた十字章で、綬で右肩から袈裟懸けにされた。もう一つの標識は、金と銀から作られた、8つの先端を持つ星章で、左胸に飾られた。

2等勲章の標識は、頸部に飾られる十字章と左胸に飾られる星章であった。これらは、プゥキレフの絵『不釣合いな結婚 Неравный брак』に描かれた初老の花婿に見ることができる[6]。

3等勲章の標識は、頸部に飾られる小形の赤い十字章であった。

4等勲章の標識は、胸に飾られる小形の赤い十字章であった。

戦功によってこの勲章を授与された者は、その綬に特別な結び目、すなわち「蝶結び бант」が施されていた。

---

[6] 論文末尾の〈付録2〉を参照こと。

トゥルゲーネフは『貴族の巣 Дворянское гнезда』の「エピローグ」で、若い出世主義者パンシンについて、多少ともアイロニーを込めて、こう書いている ——「パンシンは猛烈な速さで官等の階段を駆け登り、今ではもはや長官のポストを狙っている。歩く姿は幾分前屈みであるが、それは首に懸けてもらったヴラヂーミル勲章がその重みで彼を前方へと引っ張っているからに違いない Паншин сильно подвинулся в чинах и метит уже в директоры; ходит несколько согнувшись: должно быть, Владимирский крест, пожалованный ему на шею, оттягивает его вперёд」。ここで言及されているのは3等勲章のことである。

ゴーゴリは喜劇『ヴラヂーミル3等勲章 Владимир 3-й степени』をものしようとしたが、現存するのはその断片に過ぎない。完成していれば大いに面白い作品となっただろうと思われる。主人公は叙勲を夢見ているのだが、なんとその主人公自身が勲章になってしまうからである… そして精神病院に収監された彼は、姓名と職位を問われ、「ヴラヂーミル3等勲章」と答えてしまうのである。

同じゴーゴリの『検察官』に登場する裁判官リャープキン・チャープキンは、フレスタコーフにこう伝えている ——「このたび3年3期勤続の功に対し、上司の賛同のもとにヴラヂーミル4等勲章の叙勲を推挽されております За три трёхлетия представлен к Владимиру 4-й степни с одобрения со стороны начальника」[4幕3場]。

〈白鷲勲章 орден Белого Орла〉。1831年に導入されたこの勲章は、かなりの重みを持った勲章とみなされた。等級はなく、その標識は左胸に飾る8つの先端を持った金製の星章と、白い鷲が描かれた赤い十字章であった。十字章は青い波紋織りの綬によって右大腿部に吊り下げられるのが常だったが、さらに高位の「アレクサンドル・ネフスキー勲章」を授与した場合には、頸部に飾られた。ただしその場合でも、「白鷲星章」が胸から外されることはなかった。この勲章が授与されたのは、非常に地位の高い重臣たち сановник だけであっ

た。

アンドレーエフの短篇『県知事 Губернатор』では、県知事が「叛乱 бунт」鎮圧の功で「白鷲勲章」を授与されている。彼は群集への発砲を命じたのであった。

チェーホフの初期の短篇『女の幸せ Женское счастье』には、「白鷲勲章」を所有する枢密顧問官（3等文官）のことが描かれている。彼は「自分より上に上司などいない начальства над собой не знает」にもかかわらず、自宅では家政婦のいいなりになっている。

この勲章はまたレスコフの幻想的な短編『白鷲 Белый орёл』の題名ともなっている。

〈聖エカテリーナ勲章 орден Святой Екатерины〉。これは1714年に「女性 особы женского пола」用として制定された、専制ロシア唯一の勲章である。等級は2つあった。その標識の一つは、1等級が大きな十字章、2等級が小さな十字章で、銀（1797年までは白）の縁取りが施された赤い綬がついていた。もう一つは胸に飾る8つの先端を持った星章で、円状に「祖国愛を称えて За любовь к Отечеству」という銘が書かれていた[7]。十字章にはピョートルI世の妻、エカテリーナI世が描かれていた。

この勲章は非常に珍しく、貴族女性だけに授与されたが、授与者は勲章と同時に**〈女性帯勲者 кавалерственная дама〉**という称号も下賜されたのであった。ロシア文学の世界でこの勲章を持っているのは、ヴラヂーミル・ダーリの短篇『大貴族夫人 Боярыня』に登場する「女主人、かなり高齢の誉れ高き貴婦人 хозяйка, почётная дама давних-предавних времён」である[8]。

---

[7] これはフェドシュークの間違いで、正確には「愛と祖国を称えて За любовь и Отечество」ではないかと思われる。

[8] ここでは「女性帯勲者 кавалерственная дама」と「かなり高齢の誉れ高き貴婦人 хозяйка, почтенная дама давних－предавних времен」が分離されているが、原文では繋がっている——「女主人、かなり高齢の誉れ高き女性帯勲者 хозяйка, почтенная кавалерственная дама」。

〈聖アレクサンドル・ネフスキー勲章 орден Святого Александра Невского〉。この勲章は1725年に制定され、軍人にも文官にも授与された。その標識は、（縁取りなしの）赤い綬に繋がれた十字章と8つの先端を持つ銀製の星章であった。スゥヴォーロフとクゥトゥーゾフがこの勲章を持っていた。

トゥルゲーネフの短篇『不幸な女 Несчастная』[9] に出てくるセミョーン・マトヴェーイチの期待は、「アレクサンドル勲章の綬であったが、実際に授与されたのは煙草入れであった получить Александовскую ленту — а ему дали табакерку」[12章]。彼は政府の待遇に不満を持ち、職を辞している。

アンナ・カレーニナの夫は出世街道を行く高官であり、この勲章を授与されている。トルストイは、宮廷用の礼服に身を包み、肩に赤い綬を袈裟懸けしたアレクセイ・アレクサンドロヴィチの姿を描いている［5部24章］。息子のセリョージャが家庭教師に、「アレクサンドル・ネフスキーの上にはどんな勲章があるの？　Что больше Александра Невского?」と尋ねると、家庭教師は、「アンドレイ・ペルヴォズワンヌィ勲章です Андрей Первозванный」と答えている［5部26章］[10]。そのときセリョージャは、大きくなってすべての勲章をもらったら、アンドレイ・ペルヴォズワンヌィ以上の勲章を考案しようと夢を膨らませている。

〈聖アンドレイ・ペルヴォズワンヌィ勲章 орден Святого Андрея Первозванного〉。これは、軍人と文官とを問わず、ロシア帝国最高峰の勲章である。この勲章は1698年ピョートルI世によって制定され、ごく稀に、例外的

---

[9] 「短篇 рассказ」とされているが、最新のアカデミー版30巻全集では77頁もあり（8巻61〜137頁）、「中篇 повесть」と呼ぶほうが相応しいように思われる。

[10] セリョージャと家庭教師のやりとりをより正確に再現すれば —— セリョージャが「アレクサンドル・ネフスキー勲章」以上の勲章は何かと質問すると、家庭教師は「ヴラヂーミル勲章」と答え、セリョージャが「さらにその上は」と質問すると、家庭教師は「一番上はアンドレイ・ペルヴォズワンヌィ勲章」と答え、なおもセリョージャが「さらにその上は」と質問すると、家庭教師は「知りません」と答える —— という展開である。二人のやりとりに続くセリョージャの勲章を巡る空想は、家庭教師の「知りません」という回答に触発された形になっている。

な場合にだけ授与された。

この勲章の標識は、まずは右肩から袈裟懸けにされた空色の綬に繋がれた青い十字章、それに左胸に飾られる8つの先端を持った銀製の星章であり、星章には円状に「信仰と忠誠を称えて За веру и верность」という銘が書かれていた。この星章は祝祭日には金の鎖で吊るされた。戦功を称えて授与される場合には、「交差剣」が十字章の上、かつ星章の中央の位置に付け加えられた。

『戦争と平和』には、ティルジットにおいてアレクサンドルⅠ世がその時点では同盟者であったナポレオンに「アンドレイ・ペルヴォズワンヌィ1等勲章(орден) Андрея 1-й степени」(アンドレイ・ペルヴォズワンヌィ勲章に等級はないので、これは誤り)を授与する場面があり[2巻2編20章]、フランス皇帝は「肩からアンドレイ・ペルヴォズワンヌィ勲章の綬を袈裟懸けにした с андреевской лентой через плечо」姿で描かれている[2巻2編21章]。同じトルストイの中篇『1864年1月20日、シベリアの町トムスク近郊の商人フローモフ宅にて死去した長老フョードル・クゥジミーチの死後に公表された手記 Посмертные записки старца Фёдора Кузьмича, умершего 20 января 1864 года в Сибири, близ Томска на заимке купца Хромова』[未完]ではアレクサンドルⅠ世が自分の幼少期をこう回想している――「私はホックを外した軍服に白いチョッキ姿で、空色のアンドレイ勲章の綬を懸けていた На мне расстёгнутый мундир, белый жилетик и по нём голубая андреевская лента」[11]。これはつまり、「アンドレイ・ペルヴォズワンヌィ勲章」は、他の位の高い勲章と同様に、洗礼式や成人式の際に皇帝一族に授与されていたということである。

トゥルゲーネフの『猟人日記 Записки охотника』中の1篇『マリーナの泉 Малиновая вода』に登場する農夫トゥマーンは、彼の主人である伯爵のもと

[11] アレクサンドルⅠ世の死を巡っては当初から様々な噂が飛び交ったらしい。噂の一致点はただ一つ、皇帝存命説である。ペルミ地方で逮捕され、シベリアへ流刑されたフョードル・クゥジミーチは、その素行からいつしかアレクサンドルⅠ世だとの評判を取った人物である。詳細は、たとえばアンリ・トロワイヤ『アレクサンドル1世。ナポレオンを敗走させた男』(工藤庸子訳、中央公論社)の「エピローグ」を参照のこと。

へ「ペテルブルクの最上層と言ってもいいような方々がよくお立ち寄りになられたものでした。皆さん、空色の綬を佩用し、テーブルにおつきになり、食事を召し上がられたものでした бывало, первые, можно сказать, особы из Петербурга заезжали. В голубых лентах, бывало, за столом сидят и кушают」と、さもそれが事実であるかのように回想している。ここにはもちろん随分な誇張がある。「聖アンドレイ・ペルヴォズワンヌィ勲章」の帯勲者たちがかくも大勢して伯爵家の客となることなど、とてもありえようがなかったからである。

プゥシキンの『大尉の娘 Капитанская дочка』には、現代の読者では見逃してしまう大事なデテールが書き込まれている。プゥガチョーフの同志の出で立ちに、「灰色の農民外套の肩越しに吊るされた空色の綬以外、これと言ってめぼしいものは何一つ見当たらなかった ничего замечательного, кроме голубой ленты, надетой через плечо по серому армяку」という箇所である［11章「叛徒の本陣」］。皇帝を僭称しようとするプゥガチョーフは側近の者に、歴代の皇帝が貴顕中の貴顕にしか下賜することのなかった高貴の象徴、すなわちアンドレイ・ペルヴォズワンヌィ勲章の一標識である「空色の綬」を与えていたのである。

2節
勲章のヒエラルキー
Иерархия орденов

革命前の勲章のありとあらゆる種類や特徴を記憶に留める必要など、もちろんない。ただ勲章全体を貫くもっとも普遍的なシステム――「星章 звезда」と「綬 лента」は「頸部に飾る十字章 крест на шее」よりも上位であり、「頸部に飾る十字章」は「ボタン穴に留められた十字章 крестик в петлице」、つまり「胸に飾る十字章」よりも上位であり、1等勲章は2等、3等勲章よりも上位であるといった事柄――だけは覚えておくと便利である。

勲章には厳格な序列、すなわち寸部の狂いも許さず遵守されなければならない「勲章のヒエラルキー」が存在した。以下に勲章の序列を、低から高へという順番で表示してみよう。

アンナ4等勲章	Анна 4-й степени
スタニスラーフ3等勲章	Станислав 3-й степени
アンナ3等勲章	Анна 3-й степени
スタニスラーフ2等勲章	Станислав 2-й степени
アンナ2等勲章	Анна 2-й степени
ヴラヂーミル4等勲章	Владимир 4-й степени
ヴラヂーミル3等勲章	Владимир 3-й степени
スタニスラーフ1等勲章	Станислав 1-й степени
アンナ1等勲章	Анна 1-й степени
ヴラヂーミル2等勲章	Владимир 2-й степени
白鷲勲章	Белый Орёл
アレクサンドル・ネフスキー勲章	Александр Невский
ヴラヂーミル1等勲章	Владимир 1-й степени
アンドレイ・ペルヴォズワンヌィ勲章	Андрей Первозванный

特例である「聖ゲオルギー勲章 орден Святого Георгия」と、女性用の「聖エカテリーナ勲章 орден Святой Екатерины」は、このヒエラルキーに組み込まれていない。

上述の序列を頭に入れるのはかなりの難題であるが、かつては理解されていたのであり、しかもかなりしっかりと理解されていたのである。サルトィコーフ・シチェドリーンの長篇『僻地の旧習 Пошехонская старина』において作者は、「頸部に飾るアンナ勲章 Анна на шее」、すなわち「アンナ2等勲章」しか持ち合わせていないために、正式晩餐会の場で料理を他の将官たちよりも後回しにされる真正国政顧問官（4等文官）のことを回想している。真正国政顧

問官はこの待遇に興奮し、いきり立ち、アンナ2等勲章が「実際にはスタニスラーフ2等勲章よりも上位であること по-настоящему выше, нежели Станислав второй」を証明しようとさえするのだが、結局その努力も空しく「晩餐の礼儀作法が揺るがされることはなかった обеденный этикет был неуклоним」[13章「モスクワの親戚。祖父パーヴェル・ボリースィチ」]。

この真正国政顧問官の言い分は正しいのだが、「当時スタニスラーフ2等勲章には星章がついていた（ただし綬はついていなかった)。星章は、たとえそれがとくに良質ではないとしても、将官位の必須条件とみなされていた。そのために召使たちは、勅任文官たる彼を将官の一人とはみなさなかったのである Станиславу 2-й степени в то время была присвоена звезда (но без ленты)... Звезда, хотя бы и не особенно доброкачественная, считалась непременным условием генеральства; из-за этого слуги его, статского генерала, таковым не считали」[同前]。なんとも呆れるほどの細やかさである！

自分の地位をより高く見せようと他人の勲章を拝借する小吏たちの虚栄心は、チェーホフの短篇『勲章 Орден』においてものの見事に笑いのめされている。商人スピーチキンの晩餐に招待された教師のプゥスチャコーフは、友人のレデンツォーフ中尉にスタニスラーフ（3等）勲章を貸してくれるよう懇願する。晩餐の席上でプゥスチャコーフは偶々、彼がいかなる勲章も持たないことをはっきりと知る同僚トラムブリャンとちょうど向かい合わせに座ることになってしまう。晩餐会は台無しになるが、トラムブリャンもまた金縛り状態となり、ばつの悪い思いに駆られる。実はトラムブリャンもまた他人の3等勲章を佩用していたからである――「しかもそれはスタニスラーフ勲章ではなく、紛れもないアンナ勲章であった！ И то был не Станислав, а целая Анна!」。つまり彼は、スタニスラーフ3等勲章よりもほんの少し上位のアンナ3等勲章を身に帯びていたのである（勲章の序列表を参照のこと)。プゥスチャコーフの失望は一点に集中している――「もしもこんなことだと分かっていれば…〈略〉…ヴラヂーミル勲章を吊り下げてくるんだったな Знай я такую штуку... я бы Владимира нацепил」。

勲章が与えられたのは社会における特権階級の代表者たちだけ、すなわち貴族に官吏、将校、それに裕福な商人たちだけであるということは、絶対に忘れてはならない重要事である。『ロシア勲章法 Закон о российских орденах』にははっきりと但し書きがつけられている ——「町人、および農業従事者は、勲章授与を願い出ることができない Мещенам и лицам сельского состояния ордена не испрашиваются」。

兵卒や下士官は、たとえどれほどの武勲を立てようと、せいぜい「ゲオルギー十字章 георгиевский крестик」、あるいは〈**メダル медаль**〉の授与を期待できるだけであった。革命以前、常設の褒賞メダルの数は少なかった(「勤勉を称えて За усердие」、「勇気を称えて За храбрость」等々)。現在とは違ってかつてのメダルの大半は、頸部に飾るものであった。おそらくアリョーシャ・ペシコーフの祖父は、孫を家から追い払おうとするときに、そうした首につけるメダルを念頭においていたと思われる(ゴーリキー『少年時代 Детство』)——「いいか、レクセイ、お前はな、わしの首についているメダルじゃない。ここはお前のいるべき場所じゃない。お前は世間に出て行かなければならんのだ —Ну, Лексей, ты — не медаль, на шее у меня — не место тебе, а иди-ка ты в люди」[13章。作品掉尾のフレーズ]。

その代わり記念メダルは数多く発行され、何らかの重要な出来事や遠征、それに会戦の参加者たちに授与された。『オネーギン』ではレンスキーがラーリナ姉妹の父親の墓前でこう回想している ——

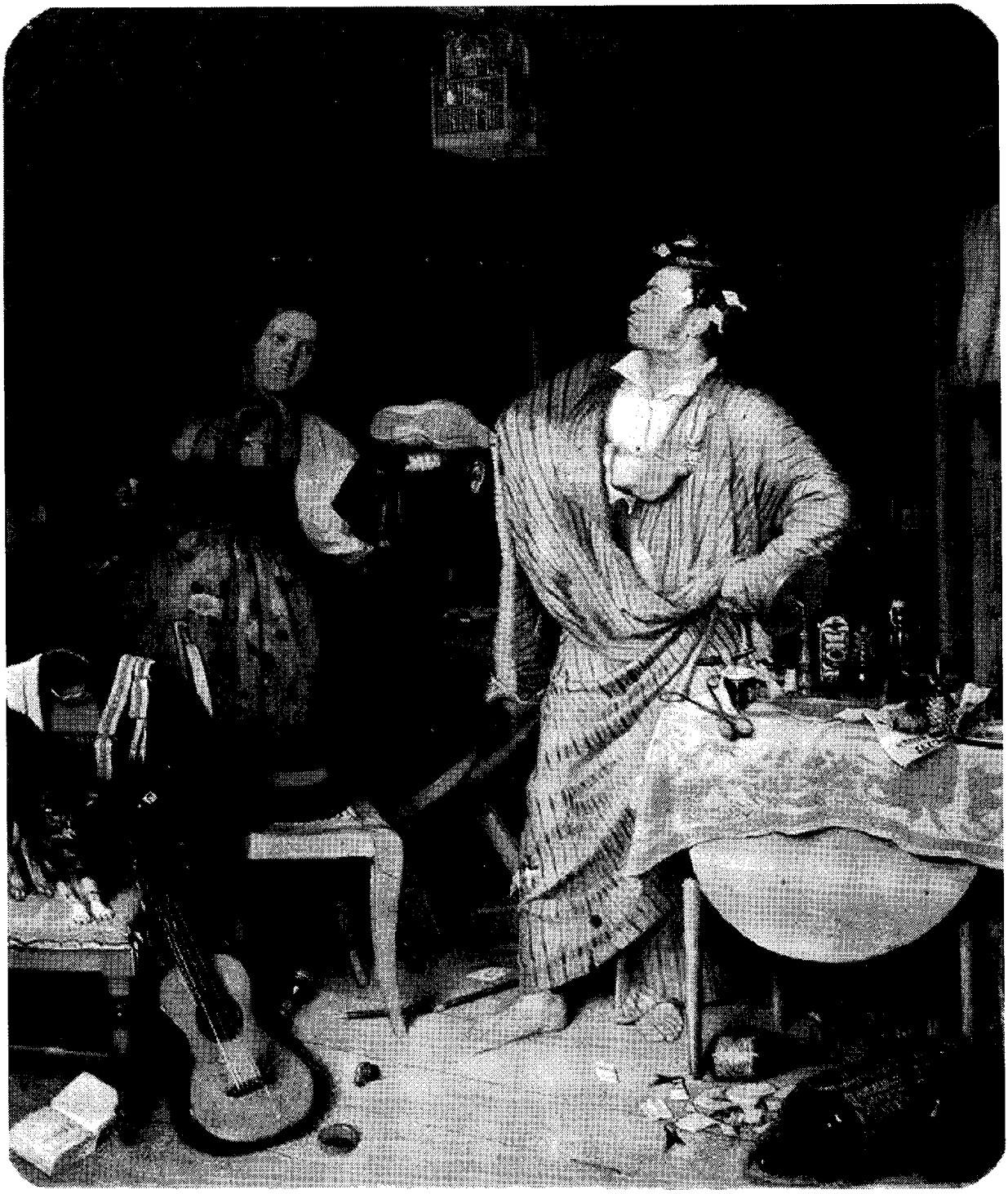
子供の頃はなんとしばしばあの人の
オチャコフのメダルで遊んだことだろう!
Как часто в детстве я играл
Его Очаковской медалью!
[2章37節/「オチャコフ」はモルダヴィアにあったトルコの要塞で、1788年にロシア軍が攻略し、1792年以降ロシア領となった]

ここから明らかなのは、物故した旅団長［つまりタチヤーナとオリガ姉妹の父親ラーリン］が1788年、トルコ軍に占領されたオチャコフ要塞の包囲戦に従軍していたということである。

規定年限勤続を称える胸章、いわゆる〈**バックル пряжка**〉もまた存在し、長年の瑕疵なき勤務に対して下賜された。オストロフスキーの喜劇『真実もよいが、幸福はもっとよい Правда хорошо, а счастье лучше』ではこう言われている――「彼は功労者であり、勤続30年対して授与されたバックルを持っている Он заслуженный человек, за тридцать лет пряжку имеет」[12]。ゴーゴリの短篇『外套 Шинель』の主人公、アカーキー・アカーキエヴィチについては次のように語られている――「長年の勤続によって彼が得たものは、同僚の洒落好きたちの言い草を借りれば、ボタン穴に飾るバックル、それに尻にできた痔ぐらいのものだった выслужил он, как выражались остряки, его товарищи, пряжку в петлицу да нажил геморрой в поясницу」。

[12] 引用箇所不明。引用作品名の間違いではなかろうか。

〈付録1〉 П.А.Федотов «Свежий кавалер»



〈付録 2〉 В.В.Пукирев «Неравный брак»